

会報

無肥研だより

第27号

2026年1月16日 発行



新年も明けまして早や半月が経ちました。昨年は記録的な猛暑に見舞われ大変な一年となりましたが、今年は何のような年になるのでしょうか。皆様と共に知恵を出し合い、乗り越えていければと思います。本年も何卒よろしくお願いいたします。

さて今回は、無肥研にとりまして、初めての試みとなりました小倉試験圃場水田の稲刈り体験（10月12日）並びに主要な行事の一つであります農産展（11月16日）につきましてご報告させていただきます。

1. 小倉試験圃場における稲刈り体験 2025.10.12

京都府宇治市の小倉試験圃場で初めての稲刈り体験を開催いたしました。当日は白岩理事長をはじめ、お子様を含む18名の方が参加されました。



今回稲刈り体験を実施した圃場は1951年より水稲ベニアサヒを滋賀県栗東町（現滋賀県栗東市）で無施肥無農薬栽培を継続してきた水田の表土を2006年に小倉水田に移し、その後、毎年継続栽培している圃場です。朝9時に集合し、最初に稲木干しの説明や注意事項等を説明の後、実際に稲刈りを体験していただきました。参加者の皆さんには鎌を使っての稲刈りや、刈り取った稲を稲木に干す作業をしていただきました。

天気は曇りでしたが、稲刈り体験をするにはちょうど良い天気でした。小さなお子様も一生懸命に親御様の稲刈りを手伝ったり、白岩理事長に参加者が色々質問される等、有意義な時間を持たせていただきました。昼食は徒歩圏内の西宇治公園の施設をお借りし、無施肥の食材をふんだんに使ったお弁当やお茶をいただきました。皆さん美味しそうに召しあがっておられ、参加者同士の交流も深める事ができました。最後に白岩理事長から、無施肥栽培と慣行栽培の違いを実際の稲を示しながら具体的に説明をいただきました。

参加いただいた方からは「心身共にリフレッシュもできたことと、無施肥無農薬の素晴らしさもわかる貴重な機会でした」、「無施肥栽培は慣行栽培より株張りは少ないのに、刈るときの負荷が大きく、イネの株元が無施肥の方が確りしていることに感激しました」などの感想をいただきました。

今回は初めての試みで小規模での実施でしたが、これからも稲刈りの他にも、田植え体験や田除草体験も企画していきたいと考えています。



白岩理事長のお話

2006年に、滋賀県栗東市にあった50年以上無施肥無農薬栽培継続の水田を初めて見ました。最も驚いたことは病気を抑える農薬を一切施していないのに、病気がほとんど無く大変綺麗なことでした。今日体験された水田は、その水田の土を移しており、この水田のイネもとても綺麗でした。

生態系を破壊する農薬を使わない、窒素・リンの放出が極端に少なく環境負荷を与えない、そして味は間違いのない合理的な農法の一部を、今日は体験していただきました。



2. 農産展 2025.11.16

農作物展示会・即売会

今年の農産展は、記録的な猛暑によって作物の出品が心配されましたが、全国51名の生産者の皆様から穀物類、根菜類、葉菜類、果菜類、加工品など総数にして210点の出品をいただきました。



いずれも丹精を込められた立派な作物を見ていただくと共に、無肥研の日頃の活動報告や調査研究のパネルなど皆さん熱心にご覧になっておられました。会場には生産者、研究者、流通関係者、一般消費者等、いろいろな方々が来場されました。中には口コミで来場された方、偶然農産展の幟を見て来場された方もおられました。

1階では無施肥無農薬栽培のお茶の飲み比べコーナーがあり、多くの方がこられて、列ができるほどの人気でした。冷茶を飲まれてから評価シートに記入していただき、続いて温茶を飲んでいただきました。いずれも味、香りなど感想を書いていただきました。この結果は次回の研究報告会におきまして報告させていただく予定です。



販売コーナーでは無施肥無農薬栽培のお米を始め、根菜類、葉菜類、果菜類のほか、お茶や加工品も販売され、多くの方で賑わいました。

白岩理事長の講評

一昨年、昨年に引き続き今年も記録的な猛暑の年でした。高温で干ばつ気味だと植物は必ず小さくなります。しかし、出品していただいた作物は大きく育った菜っ葉類や大根類があり、イモ類にも大きなものができています。無施肥無農薬栽培は施肥ほど大きくはありませんが、施肥をしなくても立派な作物ができています。その大きな要因は水管理だと思います。この会に参加されている皆様は、ぜひ水管理のコツについて交流を深めていただければと思います。



講演会

今回は、熊本県玉名郡の果樹園で温州みかん、イチジク等の柑橘類を栽培されている池田道明様から「無施肥無農薬栽培と雑草管理」と題するご講演をいただきました。

池田様は 1980 年からみかん園に就農され、2008 年から一部を無施肥無農薬栽培(無施肥栽培)に切り替えられました。2015 年から 2.5 ha をすべて無施肥栽培に切り換えられました。慣行の果樹栽培では農薬や肥料を水稻栽培以上に大量に使用されます。池田様は、お子様でも安心して食べられる、おいしいみかんを作りたいとの思いから、無施肥無農薬栽培を始められました。池田様のみかん園の雑草処理は草を刈らず、長い柄の先に鎌を付けて、草を倒すようにされています。倒れた草が地を覆うようにされるいわゆる草マルチは、直射日光を防ぐことで地温の上昇を抑える働きに加えて、保水力も優れているとお話



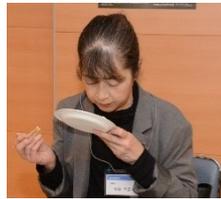
くださいました。池田様は 2.5 ha の雑草管理を一人でしておられます。また、お話の端々に無施肥栽培に対する熱意が伝わり、参加された方も熱心に聞き入っておられました。



試食懇親会

講演会終了後、資料研修館に会場を移して試食懇親会が行われました。懇親会に先立って昨年大変好評でした、お米の食べ比べを今年もさせていただきました。お皿に無施肥・施肥の別を伏せた 2 種類の炊いた白米をのせて外観、味、香り、粘り、硬さ、総合の 6 項目で評価をしていただきました。結果は後程ということにしまして、堀江名誉顧問からご挨拶をいただき、無施肥無農薬栽培純米吟醸酒(京神楽)で乾杯いたしました。参加者は無施肥栽培農産物で作られた料理をいただきながら、懇親を深めさせていただきました。来賓の先生方にも大変おいしいと好評でした。また、この時とばかりに先生方にパネル持参で質問する発表者もみられました。





次いで懇親会の冒頭で行った食べ比べの発表がありました。食べ比べを行ったお米は亀岡の無施肥栽培米と同近隣の慣行栽培米で品種は共にコシヒカリでした。結果は、「総合」は無施肥栽培米が27名。慣行栽培米が16名で同等の方が2名となりました。こちらも詳しい結果は次回の研究報告会で報告する予定です。

その後も大学の先生方や講演して下さった池田様、生産者の中道様も意見交換をされておりました。最後に京都大学大学院農学研究科教授の桂先生と近畿大学教授の森本先生からご挨拶をいただきましてお開きとさせていただきます。

堀江名誉顧問のご挨拶

無施肥無農薬栽培調査研究会やってきた研究成果を本にまとめて世の中に問おうではないかと、関係の先生方に執筆をいただきましたところ、色々なことが見えてまいりました。



その一つは、全く肥料を与えていない、有機質も与えていない無施肥無農薬栽培の土壌中の有機体炭素の量が慣行栽培より増えている。その理由を考えてみますと、圧倒的に根が深く、遠くから養分を集めてくる。また、根の量は変わらないが細い根が多く表面積が大きいいため沢山の養分を吸収できる。栄養分の乏しい環境に適応して結果的には養分を獲得する。そういった植物の適応により植物内から炭素を出している。さらに、根の回転も速く枯れた根が有機物となり肥料になるというサイクルが出来上がっている。そういう姿が見えてきました。

これらは、まだ完全には証明されていませんが、今日は若い方が沢山おられるので、是非それを証明していただきたい。そうすれば環境保全型農業の新しい姿が見えてくると思います。

これらは、まだ完全には証明されていませんが、今日は若い方が沢山おられるので、是非それを証明していただきたい。そうすれば環境保全型農業の新しい姿が見えてくると思います。

★ 今後の行事予定

総会・研究報告会・懇親会 2026年3月15日(日)

午前中は正会員の皆様にご出席いただき、当会の前年度の活動結果並びにその結果を踏まえた次年度の事業計画や活動予算等をご審議いただく会員総会を開催いたします。

午後は会員・非会員に関係なく、どなたでもご参加いただける当会の事業の柱であります、無施肥栽培の調査研究の成果をご報告させていただく研究報告会を開催いたします。また、研究報告会につきましては、会場にお越しになれない方にもZoomを用いたオンラインによる参加も計画しております。

なお、引き続きまして懇親会も併せて計画しております。

会報についてのご意見を、郵便、FAX、E-mail でお寄せ下さい。皆様のお力で会報を充実させていきたいと存じますので、ご協力のほどお願い申し上げます。
(編集担当)

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町106-2
【認定NPO法人】特定非営利活動法人 無施肥無農薬栽培調査研究会
事務局 TEL: 075-751-0347 FAX: 075-334-8058
E-mail: bureau@muhiken.or.jp URL: <https://muhiken.or.jp>
Facebook: <https://www.facebook.com/muhiken>